

令和 6 年度第 3 学期始業式式辞

おはようございます。明けましておめでとうございます。

穎明館生の皆さん、2025 年、令和 7 年のスタートをまた、新たな気持ちで迎えていることと思います。「1 年の計は元旦にあり」、新年、新学期に掲げた目標を実現できるように、努力する日々を送りましょう。

6 年生、38 期生の皆さん、共通テストが近づいてきました。38 期生皆さんの頑張りは、後輩の生徒たち、私たち教職員に勇気を与えてくれます。「切に思ふことは必ず遂ぐるなり」。最後まで強い気持ちで挑戦してください。挑戦し続ける皆さんを見守り、応援しています。

ところで今年 2025 年、令和 7 年は、穎明館高等学校創立 40 周年の記念すべき年です。そこで今日は改めて、創立者の思い、建学の精神に立ち返りたいと思います。まずは、創立者、堀越克明先生のお言葉を、1997 年（平成 9 年）入学式式辞より紹介します。

昭和 60 年、1985 年の 4 月に、ここに穎明館高等学校を新しく開校し、続いて 2 年後に穎明館中学校を併設・開校いたしました。校歌の歌詞にありますように、ここは都内ではまだ美しい緑が残っている多摩丘陵の一角で、四季の変化がはっきりと読みとれるすばらしい自然に恵まれた土地です。この土地に、今日本でどういう学校が最も求められているかということをいろいろ検討した結果、新しい発想・構想の私立の高等学校・中学校を開校したのであります。

その新しい発想・構想とは何かということではありますが、私は学校教育のお手本は何といってもイギリスという国にあると思います。今から約 550 年前にロンドンの郊外に誕生したのがイートン＝スクール、そして引き続き、学校の特色こそ違いますが、ハローとかラグビーというすばらしいパブリック＝スクールがイギリスに誕生しました。すでにそれぞれ 500 年前後の歴史と伝統を持っているわけです。

イギリスにはまた大学としてはきわめて名門であるオックスフォードとかケンブリッジという大学があります。日本では、代表的な私立学校として慶應と早稲田が、“早慶”というふうな呼び方で言われておりますが、イギリスではオックスフォードとケンブリッジを合わせてオックスブリッジと言うのだそうです。この 2 つの大学を卒業した人が、過去 500 年余にわたり、あのイギリスという国をリードし、支えてきたすばらしい卒業生を送りだしているのです。オックスフォードとケンブリッジを卒業した学生は、イギリスのエリート中の

エリートと呼ばれているのであります。

ところが、パブリック＝スクール、これは日本語で言うと私立学校にあたり、さきほどのイートン、ハロー、ラグビーという名を挙げましたが、そのラグビー校の校長にトーマス＝アーノルドという人がおられました。この校長先生が、オックスブリッジを卒業しても本当の意味のエリートとは言えない、そのオックスブリッジ、日本で言えば早慶という2つの大学に入学する前に、今挙げたようなパブリック＝スクールの学校生活を送ってきたものでなければ、本当の意味でのイギリスのリーダー、エリートとは言えない、ということをおられます。

そしてそのパブリック＝スクールの教育の目標は何かというと、第1に、学校生活は、道徳的・宗教的な規律で守られていなければいけない、第2に、ジェントルマンにふさわしい行動をとれなければいけない。穎明館は男女共学ですから、ジェントルマンと共にレディということをつけ加えておきましょう。そして第3が知的能力である、こう言っておられるのです。

ヨーロッパの各国はきわめて長い、宗教的な影響を受けていますから、学校生活も宗教的なものが非常に尊ばれ、それに根ざした道徳的な規律がすべてを支配しなければいけない。そしてジェントルマン及びレディたるにふさわしい行動をとれなければいけない。知的能力の養成というのは、3番目なんですね。いかにエリートと言えども、単なる知識・知的能力があるだけではだめだということなんです。それに先立つ道徳的な規範の中できちんと行動がとれるような、そういう人間でなければいけない。しかも、ジェントルマンとレディにふさわしい生活が送れる人でなければだめだと言っているんです。

穎明館生の皆さん、創立者のお言葉はどうでしょうか。知的能力の育成の前提として、道徳的な規範を持った行動と、紳士、淑女にふさわしい生活がなくてはならない。ここに創立者の残した書物、資料の一部をもってきました。冬休みに読み直してみました。EMKのM、Morality（道徳）について述べられていることが多いこと、また大事なことを繰り返しておっしゃられていることに改めて気づかされます。

私は新年、新学期そして穎明館40周年のスタートにあたり、創立者のお言葉、考えをふまえて、EMKのM、Morality（道徳）の観点から、3点指摘しておきたいと思います。

まず1点目、“Be Gentleman, Be Lady（紳士たれ、淑女たれ）”。

「少年よ大志を抱け」で有名なクラーク博士が、札幌農学校で示した唯一の道徳的規範は、「Be Gentleman（紳士たれ）」だったそうです。学生たちはこの言葉で発奮し、規律を保と

うと努力しました。穎明館生の皆さん、皆さんは紳士、淑女としての品格を意識していますか。品格を身につけるためには知性、理性、感性が必要です。皆さんの意識変容、行動変容を期待してシンプルに呼びかけたい。“Be Gentleman, Be Lady (紳士たれ、淑女たれ)“。

次に2点目、生命と人権の尊重。

私が教員生活において、生徒指導の基本に考えてきたことは、生命と人権の尊重です。私たちが生きていく上で、守るべき規範は多くあります。その根底に据えるべきは生命と人権だと、私は思っています。担任時代、私はあまり細かいことを言いませんでしたが、生命と人権を踏みにじるような発言や行動があったときには、厳しく指導してきました。例えば、学校生活を送る上では、他者と意見がぶつかり合うことがあります。きっと皆さんも、経験してきていることでしょう。他者と衝突したときにはどうしますか。おそらく多くの方は、よく話し合っ、解決策や妥協点を見出していると思います。それも一つの学びです。強引に力づくで、自分の思い通りにしようとする人はいませんか。理由もなく他者の権利を奪うような人はいませんよね。例えばいじめ。いじめという行為は他者の人権を踏みにじるものです。いじめは許されない、認められない。もし、いじめられている人がいたら、あるいはいじめを見かけた人は、ヘルプの声をあげてほしい。先生方は皆さんを守ります。人権尊重、すなわち誰もが生まれながらに持っている権利を守る観点から改めて伝えておきます。

最後に3点目、自律、穎明館生としての自覚、誇りを持って。

開校以来、創立者のお考えで穎明館では難しい校則や生徒心得を作りませんでした。自律、すなわち自分を律するルールは自分で作ればよいという考えからです。皆さんは、自分自身を律することのできる自覚と能力をもった生徒であると信じています。ことわざに「李下に冠を正さず」があります。疑いを受けるような行為を厳に慎むという意味です。人に見ていられようといまいと、非難されるような行為をしてはならない。一人ひとりが穎明館の生徒という自覚をもって、自分を律していくことを求めたいと思います。そして自律した仲間同士、穎明館生としての誇りをもって学校生活を送ってください。

穎明館生の皆さん、今日は2025年、令和7年そして穎明館高等学校創立40周年の記念すべき年のスタートにあたり、創立者のお言葉、考えに立ち返って、とくに、EMKのM、Morality(道徳)の観点から話をしました。道徳的な規範を守った行動をとり、紳士、淑女にふさわしい生活を送りつつ、知的能力の育成にしっかりと励む1年、3学期にしてほしいと思います。穎明館生皆の成長を心より願っています。

以上、令和6年度第3学期始業式式辞といたします。